

# 国登録有形文化財 谷岡記念館について

丸尾 佳 二

はじめに

近畿日本鉄道（近鉄）奈良線河内小阪駅で下車し、東北方へ徒歩五分、大阪府東大阪市御厨栄町四丁目一〇に位置する大阪商業大学（大商大）の正門を入ると、やがて左手に国登録有形文化財谷岡記念館が建っているのがみえる。白い外壁に、ブルーのアーチ形の窓枠、時計台が印象的な谷岡記念館は、昭和十年（一九三五）に、大阪商業大学の前身である大阪城東商業学校（城商）の本館として建設されたモダニズム建築<sup>1)</sup>で、夜間にはライトアップされ、キャンパスの中でも、ひとときわアンティークな雰囲気を漂わせている。

東大阪市のランドマーク的な歴史的建造物でもある谷岡記念館は、「東大阪歴史の道」のコースにも組み入れられており、各地から歴史散歩やハイキングで訪れる見学者も少なくない。歴史的建造物として

の谷岡記念館については、大阪商業大学開学五〇周年記念事業委員会第二部会編『大阪商業大学五〇年史』<sup>2)</sup>、日本建築学会近代建築小委員会『日本近代建築総覧（新版）』追補 大阪府（その2）<sup>3)</sup>、東大阪市教育委員会編『わが街再発見―東大阪市の建造物』<sup>4)</sup>・『わが街再発見―東大阪市の歴史と文化財』改訂版<sup>5)</sup>・『わが街再発見―東大阪市文化財ガイドブック』<sup>6)</sup>などで紹介されているが、管見の限り、立面図を掲載した文献は見当たらない。

本稿では、こうした現状に鑑み、国登録有形文化財谷岡記念館の立面図等を建築資料として収録するとともに、建物の概要について紹介したい。



## 一 創立および沿革

大阪城東商業学校は、昭和三年二月十五日、商業科目のほかに工業科目を加え、第一本科（昼間）・第二本科（夜間）を設置する甲種商業学校として設立認可され、三月三十日、仮校舎木造平屋建（六六一平方メートル）が竣工、四月一日、創立者谷岡登が初代校長に就任し、同月十日、開校式を挙行した。翌四年四月一日、木造二階建・講堂別棟の本校舎（延二、七四三平方メートル）が竣工、八月七日、財団法人大阪城東商業学校への組織変更が認可された。

昭和九年九月二十一日、室戸台風により、建築後まだ五年しか経っていない木造本校舎の三分の二（南校舎・講堂等一、九一〇平方メートル）が倒壊した。十月九日には、校舎復興のためにいち早く校舎建設復興委員会が組織され、昭和十年三月一日に、風にも地震にも倒れない鉄骨鉄筋コンクリート造（SRC造）四階建の本館（現・谷岡記念館、二、六一四平方メートル）新築工事の起工式がおこなわれ、同年十二月十七日竣工、落成式が挙行された。次いで、十三年三月五日には、鉄筋コンクリート造三階建の校舎東館（現・研究棟、一、七九三平方メートル）が竣工した。

アジア・太平洋戦争による戦中・戦後の混乱期を経て、昭和二十三年八月二十一日、財団法人大阪城東商業学校は解散し、前々年五月二十九日に設立されていた財団法人城東文化学園に吸収合併。昭和二十四年三月二十五日、新制私立大学として大阪城東大学（城大）の設置が認可され、八月十一日、財団法人城東文化学園を財団法人大阪城東

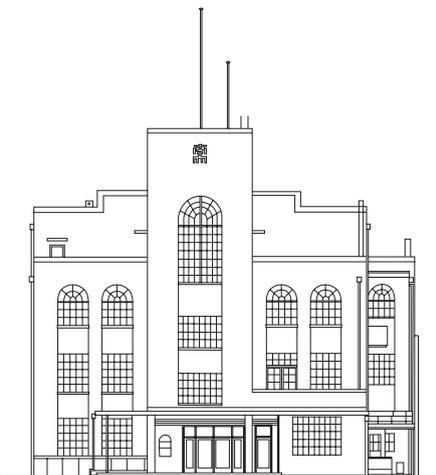
大学に名称変更。翌々年三月一日、財団法人大阪城東大学を学校法人大阪城東大学に組織変更した。

昭和二十七年三月二十四日、学校法人大阪城東大学を学校法人谷岡学園に、大学名を大阪城東大学から大阪商業大学に、それぞれ名称変更し、現在に至っている。平成十七年（二〇〇五）四月現在、学校法人谷岡学園は、二大学・一短期大学・二高等学校・一幼稚園の設置校（園）を擁し、大阪商業大学には、大学院地域政策学研究所地域経済政策専攻博士前期課程・博士後期課程、経済学部経済学科、総合経営学部経営学科・商学科・公共経営学科のほか、大学附属機関として、図書館・商業史博物館・比較地域研究所・アミューズメント産業研究所・エクステンションセンターが設置されている。

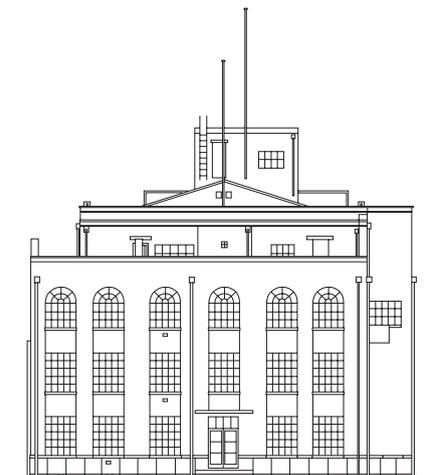
## 二 構造・規模

昭和九年九月十三日、サイパン島南西方に発生した台風は、二十一日午前五時、高知県室戸岬で中心気圧九一一・九ミリバール（ヘクトパスカル）という超大型台風となり、瀬戸内海に入って速度を増し、午前八時ごろ、最大瞬間風速六〇メートル／秒を越す暴風を伴って京阪神地方を直撃、北陸地方に抜けて北上、東北地方に再上陸ののち、午後、岩手県宮古付近から太平洋に去った。この室戸台風の被害は、三府三八県に及んだが、なかでも約四メートルの高潮も襲来した大阪府に被害が集中した。

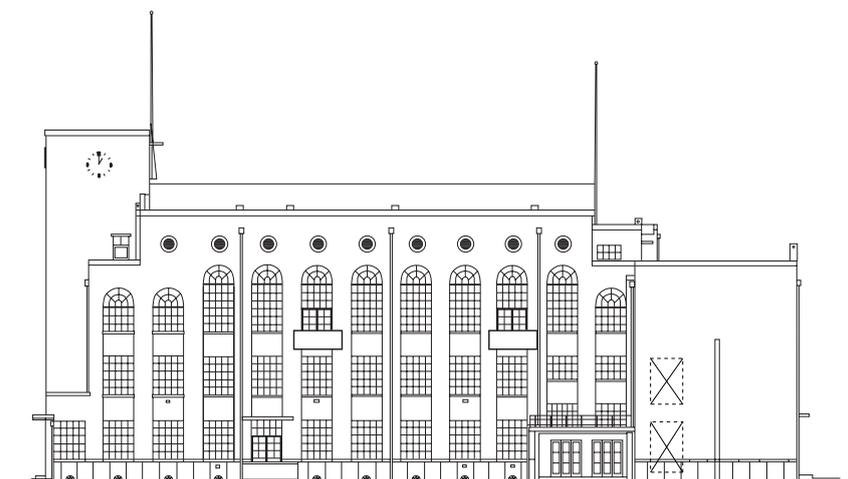
大阪府下における死者は一、八二二人、重軽傷者九、〇〇八人、行



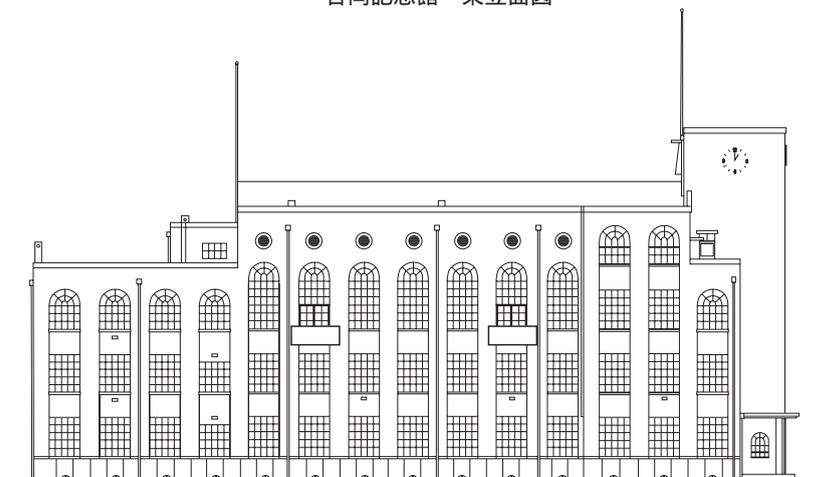
谷岡記念館 南立面図



谷岡記念館 北立面図



谷岡記念館 東立面図



谷岡記念館 西立面図



方不明者七六人を数え、家屋の全壊一万三、九一戸、半壊一万五、四三二戸、流失八〇〇戸、床上浸水二二万九、九三一戸、床下浸水二万八、六一六戸に上る大被害をもたらした。<sup>8)</sup> 午前八時前後に暴風が吹き荒れた大阪府では、ちよど学校の始業時刻と重なり、大阪市周辺部や郡部の木造校舎で、児童・生徒・教職員が倒れた校舎の下敷きになり、多くの犠牲者を出した<sup>9)</sup>ことは、よく知られている。

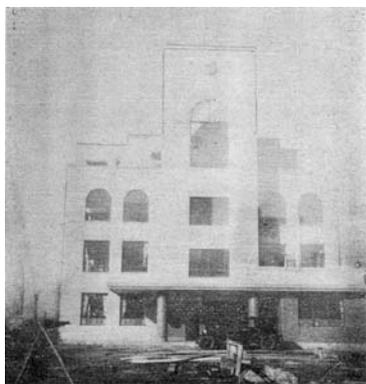
大阪城東商業学校でも、前述の通り、木造本校舎の三分の二が倒壊したが、生徒・教職員に一人の死傷者も出さなかつたのは、不幸中の幸いであつた。

翌月発足した三三名からなる校舎建設復興委員会では、この室戸台風による被害を教訓として復興計画案が練られ、耐震・耐火・耐風の鉄骨鉄筋コンクリート造四階建、塔屋付の新本館を新築することを決議、建設費用を調達するため、保護者・後援会など各方面に寄付金を募るとともに、初めて学債も発行された。また、大阪毎日新聞社に全国から寄せられた義捐金の中、二、二〇〇円が大阪府を通じて大阪城東商業学校に配分され、これも復興資金に充てられた。

こうして、昭和十年三月一日起工、七月二十四日上棟式がおこなわれ、十二月十七日落成した。総工費は、三〇万円であつた。<sup>10)</sup> なお、昭和十年は、いうまでもなく準戦時体制下であつたが、年代が、戦時体制下の昭和十二年十月の「鉄鋼工作物築造許可規則」で鉄筋コンクリート構造と鉄骨構造の建築が禁止的に制限される以前であつたことも、建築資材の鉄筋を調達する上で幸いしたといえる。

完成した大阪城東商業学校本館は、間口一一間・奥行二五間の規模で、東西二三・〇二八メートル・南北四五・四五メートルの南北棟である。原案は校長の谷岡登で、早稲田大学理工学部建築学科講師の水某<sup>11)</sup>と福田兵次郎(福田工務所)<sup>12)</sup>が共同設計し、福田が施工、復興「大阪城天守閣」(国登録有形文化財)を設計したことで知られる波江梯夫(波江建築事務所)<sup>13)</sup>が工事監督を担当した。ただし、昭和十年一月十五日付の学校新聞『城東』第三六号によると、当初、設計は大倉土木株式会社(現・大成建設株式会社)大阪出張所に依頼されたようである。

建物の外観は、直線を主体に、壁面を大胆に単純化し、装飾性を抑制したシンプルな造形で、白い外壁に、縦に配されたブルーの窓枠の上層部をアーチ形とし、側面ではその高さを増し、その上にブルーの小さな円型固定吸気ガラリ(羽板)を、東面に九つ、西面に七つ設置している。また、床下に、半円型の換気グリルがみられる。南正面に、一部五階となる塔屋を設けて時計台とし、正面の中核を構成している。学校建築では、シンメトリーなファサードをもつものが多いが、この建物では、一階外壁の一部や円柱にグリーンのタイルを貼り付けるなど、左右対称性を破り、デザインに変化の妙を与えている。(グリーン)のタイルは、一階東側の出入口周辺にも貼り付けられている。東・西両側面の三階部分には、半円筒形のバルコニーが各二カ所配され、時計台の上部北側と、屋上北端に、ポールがそれぞれ建てられている。



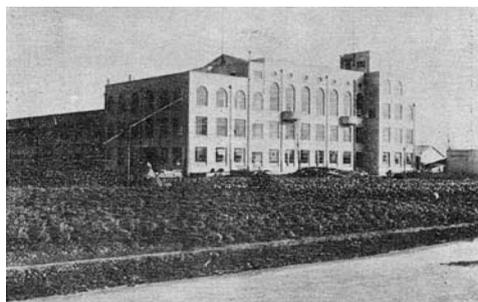
(南から)



(西南から)



(東から)



(北西から)

建築当時の谷岡記念館 全景(『城東商業学校新築概要』より)

昭和十年十月十日付の『城東』第三八号に、校長谷岡登の訓示が掲載されている。

(前略)(塔屋時計台五階地上七十尺)にしても贅沢な飾りに見へるけれどもそれは表階段に使用して無駄は無いので本校は所謂軍艦型に出来てゐるのであります。無駄の無い日本の軍艦は世界中で一番形がよいのであるが、本校のスマートな形も、自づから出来上つたもので、今後学校建築に付ても一資料となるものと思ひます。(後略)

この建築計画のコンセプトを伝える一文によれば、大阪城東商業学校本館のモデルは旧日本海軍の軍艦であり、ここに原案作成者の同時代認識とスタンスが如実に示されている。したがって、一部五階となる塔屋は旧日本海軍軍艦の艦橋(ブリッジ)を、二本のポールは前檣・後檣(マスト)を、東・西両側面の半円筒形のバルコニーは両舷の対空機銃座を、そして円型固定吸気ガラリは舷窓を模したものとえよう。

内部各階の廊下と階段は、一間半の幅をとり、ホールも広く造らされているが、これは非常時に生徒が四列で昇降できるようにとの配慮による。表玄関の腰壁部分は大理石造となっており、重厚さを醸し出している。谷岡学園学園資料室に保存されている新築工事の平面図青焼では、一階には、中廊下の東側に、グラウンドに面して南から事務室・校長室・教員室・宿直室・「小使室」、生徒昇降口を挟んで特別教室を、西側に、南から会議室兼応接室・教室二室・休

養室・便所・教室一室を配す。二階には、中廊下を挟んで教室八室と脱衣室・浴室・便所を配す。三階北寄りに教室を二室、南寄りに休憩室を二室もつほか、三階と四階を吹き抜けとして、天井をアーチ形に整えたキャバレー、五〇〇名の講堂を設け、後方に映写室と上部観覧席を配している。講堂内部は、東・西両側面の高いアーチ形の窓から外光を入れることで、採光に工夫を凝らしている。さらに、四階に研究室が設けられた（室の名称は、用途変更に伴い改称されているものがある。以上の室の名称は、あくまでも設計段階のものである）。

館内の照明器具には、球形の乳白ガラスが使用され、各教室の黒板は普通より一尺以上広いものが据え付けられて、裏黒板も付けられた。黒板の上部には、校内放送用のスピーカーが設置された。煙突を建物の外部に出すのは、美観を損なうとの理由から、導煙管を柱の内部に装備して、ストーブの煙突をこれに接続し、煙を屋上から排出する構造になっている点は、注目される。また、手洗場の横には、ダストシュートも設けられていた。

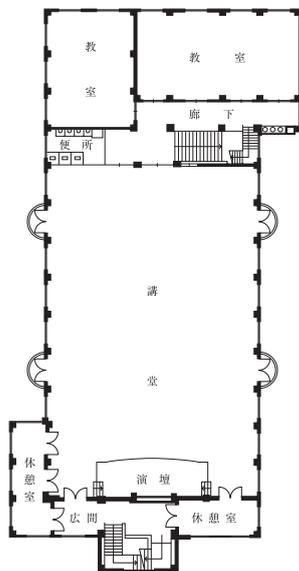
このように、従来の学校建築とは異なる意匠を取り入れ、当時としてはモダンな建造物<sup>(14)</sup>であった「白亜の殿堂」大阪城東商業学校本館は、戦後も、大阪城東大学本館・大阪商業大学本館として中枢機能を有し、創立以来学園のシンボルとして、人々を惹きつけてきたのである。

### 三 保存・復原と利活用

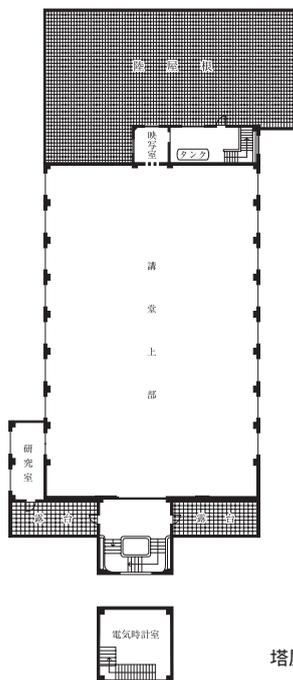
昭和四十一年一月の早稲田大学学生による授業料値上げ反対ストを契機に、学生運動が激化し、全国の大学に広がっていった。大阪商業大学も例外ではなく、同年六月と四十六年六月の二度、学生たちによって本館がバリケード封鎖された。特に四十六年六月の封鎖の折には、一部の過激派学生たちが鉄棒や火炎ビンを持ち込む事態となったため、大学当局が大阪府警機動隊の導入を要請、学生の火炎ビン・投石と、機動隊の放水車・ガス銃の応酬ののち、学生三十三人が逮捕され、封鎖が解かれた。学生・警官双方で一八人の重軽傷者を出したが、現場となった大阪商業大学本館内は、二・三階の窓ガラスがほとんど割られ、放水で濡れた椅子・机などが散乱、壁や黒板は落書で埋まるという惨状であった<sup>(15)</sup>。本館にとっては、苦難の時代であったといえる。

その後も、本館は、法人本部・大学事務局が使用していたが、白い壁が落ちて鉄筋が露出したり、窓枠が腐食するなど、建物の老朽化が目立つようになった。昭和五十三年十一月一日の学園創立五〇周年記念式典を機に、大学整備計画が進められ、本館は位置が悪いことから、解体が保存かで論議されたのち、学園五〇年の歴史を刻んだ歴史的建造物であることから、移設・復原の上、永久保存することになった<sup>(16)</sup>のである。

まず、昭和五十五年四月から、総重量四、六三四トンの本館を、曳家工法により北へ三三メートル斜行移動する大移設工事が開始され



3階

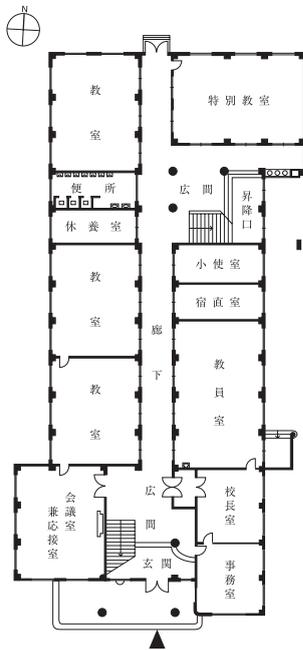


塔屋及屋上

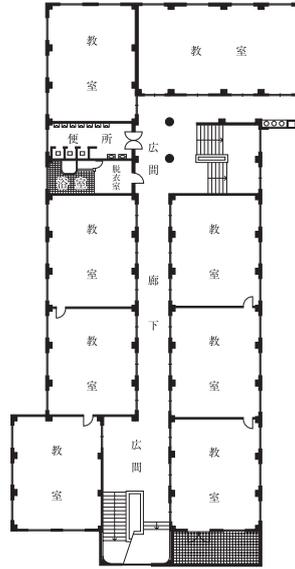
## 当初平面図

た。地表より二・七メートルまで掘り下げ、レールを敷設。建物の連続基礎（布基礎）の下部を六六本の柱脚で支え、各柱脚に転動装置二カ所を設け、油圧ジャッキ六台でバランスをとりながら、一日に〇・四〜六・五メートルの割合で移動させ、八月九日に現位置への移設を完了した。この工事の際、将来の安全を保つために、天満層に到るP・C杭一五九本と鋼管杭六五本が打ち込まれ、杭基礎とされている。

次いで、移設後に、本館の改修・復原工事が進められた。工事は、「現在の建物の姿を、竣工した時の姿にできるだけ忠実に改修、復元することを目的」とし、現況の調査・実測・写真撮影などによる記録作成ののち、改変されている箇所は、除去後復原するとともに、材料についても、「原則として再利用可能なもの又は補修して再利用に耐えうるものは再利用する。また、再利用できない材料については新品とするが、改修前の材料と同質の材料を使用すること。また市場にない材料については別注による製作とする」方針が採られた。そして、躯体から生じているクラック箇所へのエポキシ樹脂注入、壁の塗装、床フロリングの張り替え、スチールサッシの総入れ替えなどがおこなわれ、創建当時一階・二階の東北部で東側の二階建校舎と連絡していた廊下用開口は、内壁面を面落ち仕上にして連絡口の痕跡を表すようにした。さらに、一部にパーティションが新設され、トイレの平面プランが変更された。このようにして、建築当初の様態に忠実に改修・復原された大阪商業大学本館は、装いも新たに谷岡記念館として再出発することとなった。工費は、移設工事分一億七、〇〇〇万



1階



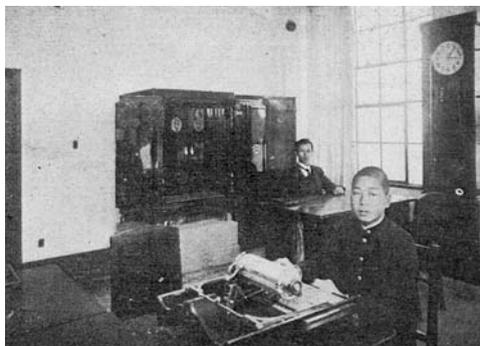
2階

## 谷岡記念館

円、改修・復原工事分三億五、〇〇〇万円の計五億二、〇〇〇万円であつた。

昭和五十八年十月にオープンした谷岡記念館には、学園史料室（現・谷岡学園学園資料室）・商業史資料室・郷土史料室が開設された。学園史料室は、創立者谷岡登の遺品を主に、学園の歴史に関する資料を、商業史資料室は、日本商業史、特に近世大坂の商業を中心とした資料を、郷土史料室は、大阪商業大学の所在地である河内の産業、なかでも河内木綿と稲作についての資料を、収集・展示した。これらは、大阪商業大学における教育・研究に寄与するとともに、広く一般に公開し、「地域に開かれた大学」をめざして設置されたものである。また、谷岡記念館内には、閲覧室のほか、バックヤード部分として、書庫・収蔵庫・特別収蔵庫・古文書補修室なども設けられた。<sup>(18)</sup>さらに、五十九年十一月に発足した中河内地域の市民文化サークルの連合体「河内の郷土文化サークルセンター」の活動拠点として、館内の一室を提供している。歴史的建造物の利活用という視点でみると、谷岡記念館は、改修・修理後に施設機能を転換し「活用的保存」<sup>(19)</sup>した保存・活用パターンに該当する。

昭和六十三年四月、谷岡記念館内に、大阪商業大学商業史研究所と大阪商業大学産業経営研究所が開設され、前者が谷岡記念館の運営を担当した。大阪商業大学商業史研究所は、平成九年四月に、大阪商業大学産業経営研究所と統合改組されて、大阪商業大学比較地域研究所となり、現在に至る。一方、平成十一年四月に、商業史資料室・郷土



1	2	3	4
5	6	7	8
9	10	11	

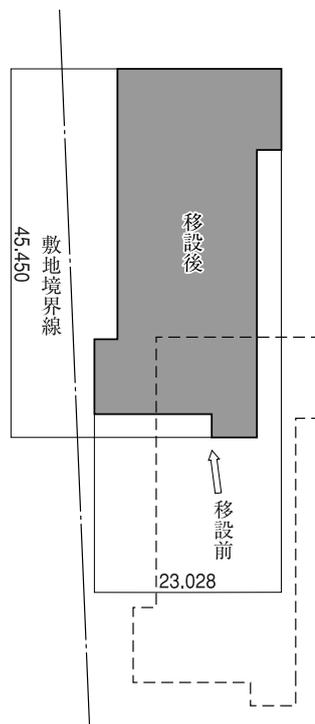
3 廊 下    4 事 務 室  
 7 生 徒 昇 降 口    8 応 接 室  
 11 研 究 室

真) 『城東商業学校新築概要』より)



- 1 玄関 2 廊下
- 5 校長室 6 職員室
- 9 教室 10 講堂

竣工当初の谷岡記念館（「新築校舍写



斜行移動工事計画一般図

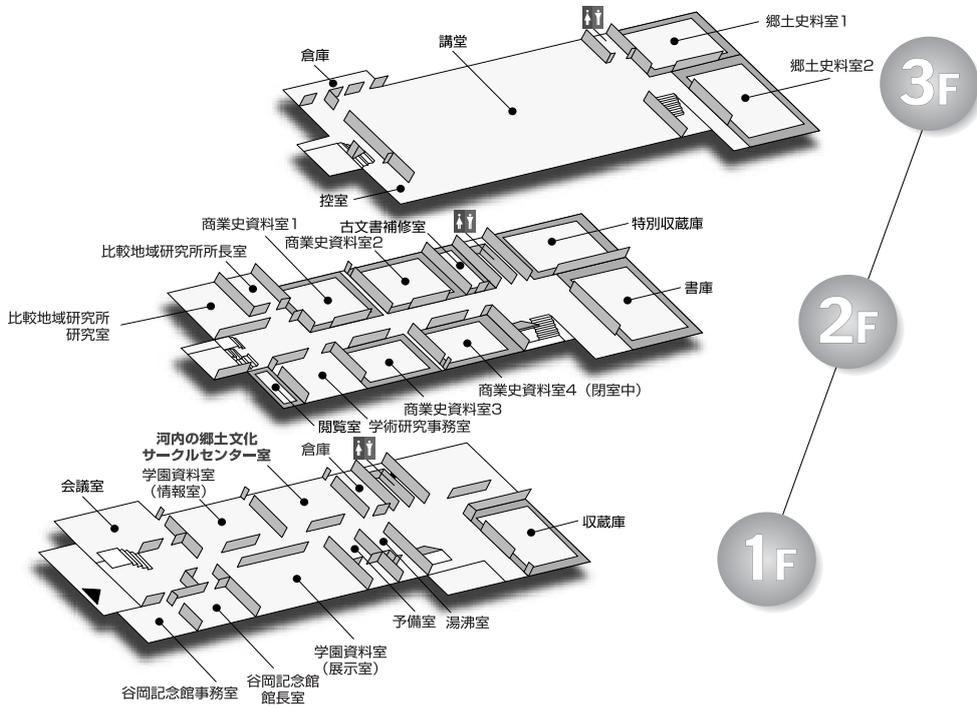
史料室を改組して、大阪商業大学商業史博物館が設置され、同年六月には、博物館法に基づき、博物館相当施設の指定を受けた。大阪商業大学商業史博物館商業史資料室の常設展示は、平成十五年九月にリニューアルされている。

ところで、平成八年に、文化財保護法の一部が改正され、有形文化財のうち、建造物（建築物・土木構造物・工作物）を対象に、重点主義的・厳選主義的な指定制度を補完するものとして、保護対象の登録、届出制と指導・助言・勧告を基本とする緩やかな保護措置を内容とする文化財登録制度が導入された。登録する建造物は、「文化財としての価値にかんがみ保存及び活用のための措置が特に必要とされるもの」と規定され、具体的な登録基準については、原則として建設後五〇年を経過し、かつ、①国土の歴史的景観に寄与しているもの、②造形の規範となっているもの、③再現することが容易でないもの、のいずれかに該当するものと定められた。<sup>②</sup>



移設工事中の谷岡記念館

国登録有形文化財 谷岡記念館について



谷岡記念館 フロアガイド (平成17年4月現在、大阪商業大学商業史博物館リーフレット「フロアガイド」に加筆)



谷岡記念館 現状全景 (南東から)



登録プレート

谷岡記念館は、前掲日本建築学会近代建築小委員会の『日本近代建築総覧（新版）』追補大阪府（その2）の追補リストに、調査者の「おすすめ品」として加えられたこともあって、大阪府教育委員会文化財保護課の薦めにより、国登録有形文化財への登録の手続きが進められ、外観および内部の意匠に優れ、「造形の規範となつ

匠に優れ、「造形の規範となつて」いるものとして、平成十二年四月二十一日の文化財保護審議会（現・文化審議会）第二五回答申を経て、同年九月二十六日、文化財登録原簿（インベントリ）に登録された（登録番号第二七〇一〇五号）。登録要件の「造形の規範となつて」いるものは、「現在又は過去の一時点において、建設行為を行うにあたり、規範として認識されているものをいう。例えば、建造物を構成する各部の比例や意匠が優れているもの、建設に名のある設計者や施工者が携わつたもの、後に類型化するものの初期の作品であるもの、各時代又は類型に特色的にみられる性格を有しているもの」である。

学園のシンボル谷岡記念館は、貴重な国民的財産である国登録有形文化財として、文化財保護法上、認知されたのである。現在、谷岡記

念館の玄関脇には、登録されたことを広く周知するために交付された登録プレートが取り付けられ、東大阪市教育委員会社会教育部文化財課によって、文化財の保護啓発のための文化財説明板が設置されている。

おわりに

以上、国登録有形文化財谷岡記念館の概要について述べてきたが、筆者が日本近代建築史について素人であるため、日本近代建築史、あるいは日本の学校建築における谷岡記念館の史的位置や、近代建築思想との関わりなどについて、言及しえなかつた。大方のご寛恕を請う次第である。

現位置移設後に実施された改修・復原工事の本報告書の刊行を期待したいところであるが、幸いにして、谷岡学園学園資料室には、谷岡記念館に関する史資料・図面・写真が保存されている。これらのアーカイブズも含め、日本近代建築史を専門とする研究者による建物の本格的な調査が切望される。本稿が、その端緒ともなれば、望外の喜びである。

（一）「モダニズム建築」の一義的な定義は難しいが、①産業革命以降の社会の建築、②ゴシック・バロックといった旧来のスタイルを保持している様式主義を廃したものの、③鉄・ガラス・コンクリートに代表される工業化された材料の使用、もしくは科学技術の進歩に裏付けられた構造技術の採用、④機能性・合理性を重視した設計、の四つがメルク

マールになる(藤崎圭一郎「15分で読める! 超カンタン」モダンズム建築」講座、『CASA BRUTUS』五四 二〇〇四 四二頁)である。日本のモダンズム建築の年代区分は、一九二〇年代から六〇年代まで、すなわち「日本分離派建築会」の結成からポストモダンズム以前までとされ、おおむね、昭和六年から十五年ごろまでの一〇年間に、初期モダンズム建築の盛期が訪れる。

- (2) 大阪商業大学・一九九九 二一・三六・三七頁。
- (3) 『建築雑誌』一一四―一四三九 一九九九 四八頁。
- (4) 東大阪市教育委員会・二〇〇二 一一七頁。
- (5) 東大阪市教育委員会・二〇〇三 二八・二九頁。
- (6) 東大阪市教育委員会・二〇〇五 四七頁。
- (7) 創立および沿革については、谷岡学園年史編纂委員会編『谷岡学園五十年史』 学校法人谷岡学園・一九七八、大阪商業大学開学五〇周年記念事業委員会第二部会編『大阪商業大学五〇年史』 大阪商業大学・一九九九、『二〇〇五谷岡学園要覧』 学校法人谷岡学園・二〇〇五参照。
- (8) 大阪府編『大阪府風水書誌』 大阪府・一九三六 八一―〇頁。
- (9) 当時、大阪市内中心部の校舎は、大正十二年(一九二三)の関東大震災の教訓から鉄筋コンクリート造になっていたが、大阪市周辺部や郡部の校舎は、木造が大部分であった。一般的に木造校舎、とくに小学校校舎の老朽化に伴う危険性が指摘されており、室戸台風は、そうした危険性を現実のものとした。
- (10) 谷岡学園年史編纂委員会編『谷岡学園五十年史』 学校法人谷岡学園・一九七八 一一六―一四一頁。なお、記録映画フィルムをビデオ化したビデオテープ「創立三〇周年記念 セミドキュメンタリ フィルム 母校の歩み」が谷岡学園学園資料室に保存されており、その一部に本館新築工事の映像がのこされている。
- (11) 中嶋久人氏のご教示によれば、早稲田大学理工学部建築学科の教員で、清水姓は清水多嘉示しか該当者がなく、同人は、昭和二十四年五

月十日から四十三年三月三十一日まで講師として在職し、デッサンなどを担当していたとのことである。これ以前の昭和二十一年度には、清水多嘉示が、早稲田大学工芸美術研究所付属技術員養成所本科の彫塑実習を担当していたことが確認できる(早稲田大学大学史編集所編『早稲田大学百年史』第四巻 早稲田大学出版部・一九九二 三五六―三五八頁)。清水多嘉示の経歴は、『清水多嘉示年譜』(『清水多嘉示作品集』 光琳社出版・一九七四)・「作者略歴」(『八ヶ岳美術館・清水多嘉示美術館』 八ヶ岳美術館・清水多嘉示美術館・一九八〇)ほかによれば、左の通りである。

- 明治 三十年(一八九七) 七月二十七日、長野県諏訪郡原村柳沢に生まれる。
- 大正 八年(一九一九) 二科展入選(絵画)、以後十二年まで毎回入選。
- 十二年(一九二三) 美術研究のため渡欧、彫刻家アントワヌ・ブルデルに師事。サロン・ド・オートンヌ入選(絵画および彫刻)、以後昭和三年まで毎回入選。
- 十三年(一九二四) サロン・デ・チューレリー会員に推薦され昭和三年まで毎回出品(絵画および彫刻)、デスピオ、ザツキン、ジャコメティ、フリエツ、カンピリ、フェノザ、等々多くの作家との交流始まる。
- 十五年(一九二六) サロン・デ・アンデパンタン会員に推薦され昭和三年まで毎回出品(絵画および彫刻)。
- 昭和 二年(一九二七) サロン・デュフラン出品作、国立ルクサンプルグ美術館所蔵となる(絵画)。

- 三年（一九二八）  
パリより帰国、院展・国展・春陽会展等に出品。
- 十四年（一九三九）  
「中支」へ従軍。
- 十八年（一九四三）  
文展委員ならびに審査員に任命される。以後、文展・日展等の審査員。
- 二十六年（一九五一）  
東京都建設局長石川栄耀博士の発想により上野公園広小路口に建設するための彫刻のコンクール（彫刻家四名選出され一三名の審査員によって）の結果、「みどりのリズム」が第一位に推挙される。
- 二十七年（一九五二）  
サンパウロ・ヒエンナレに出品。
- 二十八年（一九五三）  
第八回日展出品作「すこやか」で芸術選奨文部大臣賞を受賞。
- 二十九年（一九五四）  
第九回日展出品作「青年像」で日本芸術院賞受賞。ウエニスで開催された国際造形芸術会議に日本首席代表として出席、国際造形芸術連盟成立の上、同連盟の執行委員に選出され、就任（執行委員一〇名）。ウエニス市チニー財団主催の「具象芸術と抽象芸術」の討論会に出席、発言は出席者五八名中二名、その論旨はフロレンスのサンソニ（Sansoni）出版社の“Arte Figurativae Arte Astratta”（二二六頁）に収録発売されている。私の意見として、「名題“L'art est Toujours Synthèse”で真の造形芸術作品は具象的要素と抽象的要素とが総合されていなくてはならないことを強調してある」（議長のローマ大学ベンチュリー教授も共感された）。ミラノ市の放送局よりトリエンナーレ展ならびにミラノ市についての感想を放送。
- 三十年（一九五五）  
パリ・ユネスコハウスで開催された国際造形芸術連盟執行委員会に出席。
- 三十九年（一九六四）  
五月五日より九月十五日まで開催された「ブルデルを巡る二十世紀の胸像の歴史展」に彫刻二点出品。十月ジュネーブに本部のある国際電気通信連合（ITU）の創立百年祭記念事業としてジュネーブの国際広場に建設するモニュマンのための「国際彫刻コンクール」の審査員を委嘱される。同審査員ザッキン（仏）、メドス（英）、マリニ（伊）、カルダーの代りにリポールド（米）、ファイデッシュ（ソ）、ジャコメティ病欠（瑞）、清水（日）。
- 四十年（一九六五）  
一月十五日付日本芸術院会員に任命される。国際彫刻コンクール審査のため六月および十二月の二回ジュネーブに行く。審査終了後欧州各地を見学、アメリカ経由で帰国。
- 四十四年（一九六九）  
勲三等瑞宝章受賞。
- 四十六年（一九七一）  
紺綬褒章を受章。日本橋三越にて自選展。

- 四十九年（一九七四） 日本橋三越にて作品集出版記念展。  
五十五年（一九八〇） 文化功労者に選ばれる。  
五十六年（一九八一） 五月五日、東京で没。八四歳。
- しかし、「清水多嘉示教職年譜」（前掲『清水多嘉示作品集』）には、昭和戦前期において、早稲田大学理工学部建築学科の講師をしていたという記述は見られず、清水多嘉示の絵画・彫刻作品を所蔵・展示している八ヶ岳美術館（原村歴史民俗資料館）に、この点について照会中であるが、今のところ明らかでない。新本館の共同設計は昭和九、十年ごろと思われるが、この時期、清水多嘉示は、本務校の帝国美術学校（現・武蔵野美術大学）に助教として勤務するかたわら、東京府立第一高等女学校（現・東京都立白鷗高等学校）に講師として出講していた（同前）。早稲田大学理工学部建築学科講師清水某については、検討の余地があり、後考を俟ちたい。
- (12) 福田兵次郎（福田工務所）は、昭和九年十月、大阪府中河内郡布施町（現・東大阪市）永和の地に、一、〇〇八畳敷の大広間を有する鉄筋三階建の「ひとのみち教団仮本殿」を建築している（『ひとのみち』一一二—一九三四、『大阪今日新聞』昭和十年十二月十七日付）。本店は、東京市豊島区池袋二丁目八九五、支店が、大阪府中河内郡布施町高井田二二八一にあつた。生没年未詳。
- (13) 明治十八年（一八八五）—昭和四十年（一九六五）。東京帝国大学工学部建築学科卒業。安田商事・辰野片岡建築事務所を経て、大阪市に移り、建築課長として「大阪市立美術館」などの設計を統括した。
- (14) モダニズムは、日本において学校建築の中にいち早く受容されていった。機能上の要求が複雑な学校建築において、モダニズムがもつとも真価を發揮したからである。
- (15) 『朝日新聞』『毎日新聞』『讀賣新聞』『サンケイ新聞』『日本経済新聞』各夕刊昭和四十六年六月四日付、『大阪新聞』昭和四十六年六月五日付。
- (16) 白川哲郎氏は、「近代建築が学校建築、すなわち校舎である場合、それぞれ为学校を代表する校舎は、教育・学問の場として、その学校が創立以来連綿と築き上げてきた歴史、いわゆる『伝統』を象徴する役割を果たす。とりわけそこで学んだ同窓生にとつて、そうした校舎は、学校時代の懐かしい『記憶』を維持し、共有し続けて行くための拠り所としても機能する。他の近代建築に比して、校舎に共有される『記憶』は、より凝縮された性格を有することになる。』再開発の名の下に多くの近代建築が取り壊しの危機にさらされている中で、関係者の努力によつて学校建築に様々な手だてが講じられ、保存される事例が相対的に多いのは、かかる事情によるものである」と指摘している（『樟蔭学園の有する文化遺産〈近代建築〉とその教材化の試み—文化財論』の講義記録②）『大阪樟蔭女子大学論集』四二—二〇〇四 六五頁。
- (17) 谷岡学園学園資料室所蔵「大阪商業大学本館移設工事 移動工事説明書」、『Campus mate』一一一九八〇。
- (18) 学校法人谷岡学園法人本部総務課所蔵「谷岡記念館改修工事 竣工図」、『Campus mate』九一九八四。
- (19) 鈴木博之「歴史的建造物の保存・活用・開発—由緒正しさを求めて」『文化庁月報』三三三—一九九五 五一—七頁、のち改題の上、同『現代の建築保存論』王国社・二〇〇一所収 一一—一四頁。
- (20) 国の文化財登録制度は、平成十六年、文化財保護法の一部を改正する法律が成立し、従来の建造物に加え、建造物以外の有形文化財、有形の民俗文化財および記念物にも拡充された。
- (21) 村上詔一「登録制度の内容と今後の進め方」（『月刊文化財』三九七—一九九六）一九頁。
- (22) これら全般については、村松貞次郎『日本建築家山脈』鹿島出版会・一九六五、菅野誠・佐藤讓『日本の学校建築』発祥から現代まで・資料編 文教ニュース社・一九八三、藤森照信『日本の近代建築』下大正・昭和篇 岩波書店・一九九三、佐野正一・石田潤一郎『聞き書き関西の建築 古き良き時代のサムライたち』日刊建設工

業新聞社・一九九九、酒井一光「昭和モダニズム建築と建築家」(『大阪春秋』一〇二二二〇〇一)、芦屋市立美術館博物館編『関西のモダニズム建築二〇選』淡交社・二〇〇一、田中禎彦『日本の美術』四四八日本人建築家の軌跡 至文堂・二〇〇三などを参照されたい。

〔付記〕

本稿作成にあたっては、谷岡学園学園資料室の小笠原博子氏、学校法人谷岡学園法人本部総務課の土橋浩介氏・吉田康弘氏、学校法人谷岡学園秘書室の片山晶博氏、早稲田大学大学史資料センターの中嶋久人氏、八ヶ岳美術館(原村歴史民俗資料館)の豊岡鮎子氏のご協力・ご教示を得た。記して、謝意を表したい。